
不老不死

椎名 カズキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不老不死

【Nコード】

N7349B

【作者名】

椎名 カズキ

【あらすじ】

戦乱の時代。人が戦いによつて死んでいく時代。しかしその時代は様々な英雄を創り出した時代でもあった。不老不死がそうである。彼らは不死身の身体を手にいれ、人々から畏怖される存在でもあった。しかしその者達は後に『最悪な結末』を迎えるとは知るよしもなかった。

第一話・永遠の命（前書き）

稚拙な文章ですが、どうかよろしくお願ひします。

第一話：永遠の命

不老不死。

老いることがなく死ぬことのない身体。

永遠の命。

それが不老不死。

それを追い求める者は後を絶たない。

世は戦乱の時代。

世界中の強き者達はその身体を求めた。

ある者は守るべき自分の国のために。

ある者は大切な誰かを守るために。

ある者は己が夢を叶えるために。

人の命はあまりに儂い。

その儂さが人間の美しさであり普遍的なものである。

それを捨ててもやらなくてはならないことが彼らにはあった。

第二話：登録

『待ってくれー！』

そう叫びながら男が走っていた。

『ふう…なんとか間に合ったな…』

男は両手を机に置きながら息をついていた。

『おい若いの。休んでいるところ悪いが…』

椅子に座っている老人が男に話しかけた。

『わかってるよ。ここに名前を書きゃいいんだろ？』

男はやや強い筆圧で自分の名前を机に置いてある用紙に書き込んだ。

《ディオルガ「ハンリー」》

老人はその名前を見てぎょっとした。

『あんたは…』

『ああ…要するにな、俺みたいな変わり者もいるってことですよ』
顔見知りであろうか。

老人はやれやれといった顔が話しはじめた。

『変わり者か…この試験を受けに来る連中はわしから見れば皆変わり者よ…どうしてそんなに《永遠の命》を欲しがるものかの。全く解せんよ』

不老不死の試験　。

それは約4万年もの歴史を持つ試験である。

この試験を通過した者だけが不老不死となる。

参加希望者は会場のラクタリアル山の麓の村で登録を行い、はじめて試験に参加できる権利を得る。

ディオルガ「ハンリーが急いでいたのはつまり登録最終日しかも時間ギリギリに来たからである。

『おや…』

『ん？どうした？』

『やれやれまた《変わり者》が来たわい…』

老人はため息をついた。

『待ってくれー！』

どこかで聞いたような文句を叫びながら少年がこちらに向かって走っている。

『ガキが受けるのか？まさかな』

老人はディオルガ「ハンリーをちらつと見た。

老人はまるでディオルガ「ハンリーもそこで走っている少年も大して変わらない所詮ガキであるともいいいたそんな顔である。

第三話：異郷の地

『ネロアⅡトランス…』

老人は記録用紙に書かれた少年の名をつぶやいた。

『何故その若さで不老不死の試験を？』

もちろん老人は受験希望者に辞めさせる権利は全く持ってないし、上から受験理由を問えとも言われていない。

ただ単に個人的に気になっただけであろう。

ネロアⅡトランスはさして考えずに答えた。その顔はどこか輝きに満ちている。

『俺には夢があるんだ』

『夢？』

『そうさ。この世界の全てを渡り歩いて世界地図をつくる。それが俺の夢だ』

『やめとけ』

ネロアのことを気にかかったのであろうか。先ほどからそこにいたデイオルガがぼやいた。

『確かに不老不死になりやあできることかもしれない…だがこの試験には生死がかかってんだ。ここで死ねば元も子もねえよ』

『……………』

ネロアは黙った。

『てめえのようなガキにその覚悟はあるのか？』

『てかオッサン誰？』

『な…オッサンだと…』

よほど不本意だったのであろう。ディオルガは苛立った。

『ガキ。俺様はこう見えて25だ…』

『え！嘘でしょ…』

確かにディオルガの髭が濃く貫禄が備わっている顔は35歳以上過ぎていくようにも見える。おまけに髪はボサボサだ。

『更にこの民族衣装を見ても俺がいかにすごいやつかわかっていないようだな…』

『そんな民族衣装なんか見たことないよ』

『なら教えてやろう。この民族衣装は俺らハンリー一族を示すものみたいなものだ。ハンリー一族はここよりさらに北のハンニル山からワン草原を支配している狩猟民族だ。その歴史は…』

『わかったわかったよ…えとつまりすごく有名な一族ってことなんだろう？』

ネロアはやや合わせたように言った。

『どうやらわかってくれたようだな…にしてもハンリーも知らんとはどこの出身だ？』

『サーモ村だよ』

『どこだそこ？初めて聞いた村だな…』

『サーモ村というのは…』

ネロアとディオルガのやりとりを聞いていた老人が不意に説明しだした。

『サワラ砂漠の西の方じゃ』

『はあ？おい待てよサワラ砂漠の西に人が住むような場所があんのか？しかもここまでたどり着くのにかなり時間がかかるぞ』

ディオルガが不審がるのも無理はない。サワラ砂漠はここからとつともなく離れている場所で、しかも砂嵐が毎日のように起こり、猛毒を持った蛇やら蠍やらその他危険な動物がたくさんうつっている地域としても有名である。

そこからここまでの距離はディオルガの故郷ワン草原から試験会場のラクタリアル山までの距離の10倍はある。

ちなみにディオルガはワン草原からラクタリアル山までの距離を3日で来たから、ネロアは30日以上もかけてここに来たことになる。

その道中では戦争などに巻き込まれる可能性まである。

いずれにせよネロアは困難を乗り越えてここにたどり着いたことになる。

第四話：宿屋へ

『お前よくここまでたどり着いたな…』

『まあね。サワラ砂漠はよく行き来してたから慣れてるし』

どうやらネロアは何回かサワラ砂漠を通った経験があるらしい。
ネロアは普通に言ったが、ディオルガにしてみれば舌を巻くほどのことである。

『ところでお前は宿泊の予約はとってあるのか？』

え？とネロアは言った。

『何も知らねえでここまで来たのか…しょうがねえな…俺の予約先で一緒に泊まるか？』

以外であったのかネロアはひどく喜んだ。

『本当かよオッサン！ありがとな〜』

『ちょっとこっち来いネロア』

『ん？何？』

ネロアがディオルガに近づこうとした瞬間ディオルガの拳がネロアの頭に直撃した。

『痛つて〜』

「俺はオッサンじゃねえ！ディオルガ！ハンリーだ！ディオルガと呼べ！」

この男どつやら短気らしい。

「わかったよ〜ディオルガ…」

「わかればいいんだ…じゃあなじじい！明日また会おうぜ！」

記録委員のおじいさんは微笑を浮かべてああ、と返事をした。

ディオルガは宿屋の方へ歩いていき殴られた拍子に倒れていたネロアは慌ててディオルガの後を追った。

途中で振り向きネロアは記録委員の方を向いて叫んだ。

「じゃあなー！じいさんまた明日なー！」

老人は手を振りながらつぶやいた。

「全く…走ってここに来て走って帰っていきおったわい。忙しいガキじゃな…まあ本当に大変なのはこれからじゃがな」

空はもう少しで赤く染まり、漆黒の闇が訪れる。

そして明日には生と死をかけた戦いがはじまるのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7349b/>

不老不死

2010年12月18日14時29分発行